



いか。そのことを真剣に考えた。真剣に考えたことを充分に実行に移すことが出来たかと問われれば恥じ入らねばならないが、それでも、大患によって私の人生観は大きく変り、死をいつも前面に立てて生きることの緊張が私の人生を励まし、無常を無常として受け入れながら、無常をわがうちにおいて克服することが病後の許された年月における私の課題になった。

いまの私は病後の十年間にくらべれば先途に対してひらけたものを感じている。人生不定、いつどこで何があっても驚かないつもりだが、老後を考える余裕も戻ってきていないわけではない。願わくはその許されるかぎりの生の時間を充実のうちに過ごし、人生をつねに名残の心をもって味わいたい。そう思っている。』（「誕生日」革新 1979年9月号）

本書の表題になっている『死に臨む態度』は、先生がインターンの時経験された、20歳半ばの、身寄りがない癌性腹膜炎の青年のことから始まる。その青年は、不治の予後にもかかわらず、最後まで、晴朗とすごされたのである。

私も思い出した。市中病院に勤務して2年目、私が担当医となった44歳のKさんのことである。病院に来られたときは、もう、肺がんの末期であった。亡くなる2日前、看護師らと、ベッドで、小さな庭であるが、薔薇を見に行った。そして、その夜、その散歩が至極気に入ったことを久しぶりの笑顔で話し、最後に「先生、段々と空気が薄くなり、息が難しくなっています」と言った。私は、黙って、部屋をあとにした。

この随筆は次のように終わっている。『真に死をおそれぬ人間がこの世にいること、平家物語や太平記の語り草にとどまるものではないと知るのは、私のようなこころ弱い人間には、無上の教訓に、ちがいない。』（新潮45 1987年11月号）

最後に先生の文字への思いを抄出する。

『道に大きく書かれた字を踏んで歩くのにも、抵抗がある。本や新聞や、そのほか何でも、字のあるものは踏まないようにしつけられた古い世代の感傷だろうか。』（「歩く、食べる、見る」Voice1981年2月号）私も、「止マレ」を跨いで通るようになった。

会員 井上 林太郎